

# エジプト労働運動小史

ラウーフ・アッバース

(木村喜博訳)

はじめに

- I 労働運動の勃興
- II 両大戦期における労働組合の形成
- III エジプト共産党
- IV 労働運動に対する民族ブルジョアジーの支配
- V 共産党組織の復活
- VI おわりに

はじめに

エジプトにおける労働運動は、〔モハメッド・アリー〕専売制崩壊後の経済発展と19世紀後半期の市場経済の導入の結果として発生した。専売制の崩壊は、国家的規模での代替産業を育成することなく、外国人の投資活動に道を開いてしまった。国家の負債、農業土地会社、抵当信用、水道・ガス・電気供給などの公益事業、および運輸・通信などに膨大な量の外国資本が投下された。

これら企業の設立によって筋肉労働者に対する需要が増加した。これらの企業の労働者たちには三つの要素が含まれていた。(1)農村社会からの移動者、主に都会に職を求めてやってくる土地無き農民、(2)ヨーロッパ商品との競争に難儀している若干の手工業者、(3)職を手に入れ、キャプチュレーションの利得にあづかろうとしてエジプトに移住してきた地中海諸国の失業したヨーロッパ人熟練労働者。19世紀最後の10年間には、これら三つの要素がエジプトの労働者階級を構成していた(注1)。

(注1) 拙著、*al-Harakat-ul-Ummalieya fi Mişr*

1899-1952, Cairo, 1968, pp. 45-46. [*The labour movement in Egypt 1899-1952*]

## I 労働運動の勃興

これらの企業における労働条件は劣悪をきわめ、労働時間には制限がなく、賃金は低かった。1日当りの労働時間は平均して13~17時間であった。そこで、1日10時間労働制を獲得することが当時の労働者階級の主要な要求であった(注1)。最高賃金は、未熟練労働者で1日3ピアストル、熟練労働者で1日8ピアストルであった。そして、たとえエジプト人労働者が〔ヨーロッパ人労働者と〕同一資格を有していても、ヨーロッパ人労働者の方がエジプト人労働者よりも賃金において優遇されていた。

19世紀最後の10年と20世紀の初頭に、エジプト人労働者階級はストライキを組織して待遇の改善を要求した。われわれは、これらのストライキの正確な開始時期に関しては適切な資料を持ちあわせていないけれども、1899年12月にタバコ製造労働者が組織して3カ月間続いたストライキに関して、突然、豊富な資料に出くわすことになる。

このストライキは十分な組織化を行ない、労働者たちはエジプトで最初の労働組合を結成した。このことは、われわれに、このストライキに先行していくつかのストライキが存在し、エジプト人労働者階級がそこで訓練を積んでいたことを確信させている。モハメッド・ファリード Mohamed

Farid は、1894年にポート・サイド Port Said でストライキがあったと述べ、さらに、「ストライキはエジプトを襲ったヨーロッパの病気の一つである」<sup>(注2)</sup>と主張した。このことは、1890年代の初めに、エジプトに労働者のストライキが存在していたことを意味している。

20世紀最初の10年間には、ヨーロッパ人によって組織された労働ストライキが多数発生し、これにエジプト人労働者が参加している。これらのストライキは、資本に対する集団闘争の経験を積むという意味において、エジプト人労働者階級に対して絶好の機会を与えた。これらのストライキの成果はきわめて限定されたものであった。しかしこのストライキは、「労働者協会」として知られている労働組合の設立を、エジプト人労働者たちに十分に鼓舞したものであった。しかしながら、これらの団体は官憲の攻撃を受けて短命に果ててしまった<sup>(注3)</sup>。

1907年の経済恐慌の結果、生計費が著しく増加した。同時に、企業家たちは賃金を引き下げ、労働者の数を削減した。エジプト人労働者階級は、再び労働組合を結成し、経済的諸要求を掲げて闘争を続けた。民族主義運動のブルジョアの指導は大方が外国系企業に対する闘争を支持していた。

1908年10月、カイロ鉄道株式会社 Cairo Tram Company の労働者が、1日の労働時間を13時間から8時間に短縮すること、賃金の40%アップ獲得、有給休暇と病気休暇の獲得、賃金と昇進とに関してヨーロッパ人と同等扱いにすること、労働組合に対する会社の承認を獲得することなどを掲げてストライキに突入した。このストライキは十分な組織化が行なわれ、国民党 the Nationalist Party によって支持されはしたものの、要求項目の獲得には成功しなかった。そして、警察は労働

者を攻撃し、180人が逮捕され、裁判にかけられ、処罰された。このストライキでは、エジプト人の指導による最初の労働組合の結成がもたらされたにとどまった。

労働運動に対する国民党の支持は、イギリスの占領に対する民族主義闘争に労働者階級、農民、知識人を組み込むための戦術にすぎなかった。この目的を果たすために、党は、1910年に ニカーバトウ・ウツマール・アル・サナーイー・アル・ヤダウィーヤ Nigābat Ummal al-Ṣanā'īf al-Yadawīya (職人労働組合) を設立した。この組合は、アレキサンドリア Alexandria とマンスーラ Mansura とタンタ Tanta に支部を設け、カイロ市内の労働者居住地区アル・サブティーヤ al-Sabtiya にクラブを設置した。クラブでは、労働者の意識を覚醒するために<sup>(注4)</sup>連続講演を企画した。労働組合の組合員総数は1909年の979人から1912年の3139人へと増加した<sup>(注5)</sup>。

占領当局は、国民党を弾圧することによって民族主義運動を排除した。党の指導者モハメッド・ファリードは亡命のやむなきにいたった。国民党の弾圧は労働組合への厳しい攻撃を伴った。第1次世界大戦の初めに、占領当局は戒厳令をひき政治活動を弾圧し労働組合を解体した。

(注1) Colombe, Marcel, *L'Evolution de L'Egypte 1924-1950*, p. 186.

(注2) Mohamed Farid, *Tarikh Miṣr min Ibtidā*, 1891, masihīya, manuscript, Part 4, p. 79.

(注3) Colombe, M., *op. cit.*, p. 187.

(注4) 拙著, *op. cit.* pp. 59-64.

(注5) Iryan, Mileka, *Markaz Miṣr al-Iqtisādī* Cairo, 1923, p. 88.

## II 両大戦期における労働組合の形成

エジプト人労働者階級の展開に関して二つの要素が戦争によって発展させられた。(1)戦時中の工

業生産の増進のおかげで労働者数が1907年の45万7269人から1917年の63万9929人へと増加した。(2) 戒厳令のために労働組合主義が後退し、労働者は経済的諸要求のために闘うことができなくなった(注1)。戦時中に、生計費のほうが、2倍上昇したにもかかわらず、平均賃金は固定したままであった(注2)。

民族ブルジョアジーの団体であるワフド al-Wafd の指導のもとに、労働者階級が1919年の民族主義革命に参加したことにはそれなりの理由があった。革命は、労働組合の再建に絶好の機会を提供してくれた。

戦後になると、労働条件は悲惨なものとなり、戦時中に軍当局が設立した工業の大半が営業を停止し、多数の労働者が職を失った。労働力供給が労働市場における需要を凌ぎ、賃金を引き下げている。が、他方、生計費は第1表(注3)にみられるごとく増加していた。

第1表 生計費 (1913-14=100%)

年次	百分率
1919	202
1920	237
1921	196
1922	176
1923	162

それゆえ、労働者は生計維持が困難となった。労働法の制定と失業者に職を与えることを要求してストライキが打たれた。これらの状況は、労働者階級における社会主義者の政治活動に恰好の雰囲気を提供することになり、さらには労働者の階級意識を目覚めさせることとなった。

(注1) Abdul Azim Ramadān, *Tatawwural-Harakat el-Watāntya fi Miṣr 1818-1936*, Cairo, 1968, p. 82.

(注2) *National Bank of Egypt 1898-1948*,

Cairo, 1948, p. 50. (創立50周年記念号)

(注3) *Ibid*, p. 51.

### III エジプト共産党

1918年早々、在留外人の居住するアレキサンドリア、カイロ、ポート・サイドなどの大都会に、エジプトで最初の革命的社会主義者の細胞が出現した。さらに2年後には、アレキサンドリアで、イタリア系の宝石商ヨセフ・ローゼンタール Joseph Rosenthal がエジプト社会党 Egyptian Socialist Party を設立した。かれは、20世紀の初めから労働組合を組織化して「経済闘争の中心およびイデオロギー訓練の場」たる連合体にまで発展させるために努力していた。1921年1月、わずか3000人のメンバーからなる連合が結成された。

時を同じくして、エジプト知識人グループが社会主義研究のための「協会」の創設を計画していた。かれらは、アレキサンドリアの社会党のことを耳にして、ローゼンタールと連絡をとり、ついにその党——アレキサンドリアに支部を残してカイロに〔本部を〕移転していた——に加わった。

ヨセフ・ローゼンタールは、外国人の影響がはいり込むことを避けて党の綱領には手をつけなかった。綱領の作製は、サラーマ・ムーサ Salama Mūsa, アリー・エル・イナニ Ali el-Inani, モハメッド・アブドゥッラ・イナム Mohamed Abdulla Inan, マフムード・ホスニー・アル・ウラービー Mahmūd Hosnī al-Urabi によって着手された。

綱領によると、党の政治的目標は、エジプトの解放とイギリス軍隊の撤退、帝国主義・軍国主義・独裁に対する闘争、独立に対する人民闘争の支持、そして秘密条約の廃止などにおかれていた。そして、経済的目標は、社会主義国家を設立し天然資源と生産力とを大衆の福利のために利用するこ

と、生産物の分配は個人の生産能力と資格とに応じてなされるべきこと、資本主義的競争を廃止することなどであった。さらに、社会的目標は、すべての男女に対する無料での教育、民主主義を普及すること、賃金引き上げと社会保険の実施による労働条件の改善、<sup>オリエント</sup>東洋女性の解放などであった。労働組合と議会および県議会の社会主義者に従った政治的闘争によってこのプログラムを実行すべきであり、しかも選挙は自由になされ投票は女性をも含めた全エジプト人に保証されるべきであると党は述べていた<sup>(注1)</sup>。

党は全く穏健で革命的な行動や階級闘争を回避していたけれども、社会主義はイスラームと社会保証に反するものである<sup>(注2)</sup>と主張する激しい反動主義運動が始まった。自由派の知識人として有名なモハメッド・フセイン・ヘイカル Mohamed Hussein Heikal は、社会主義は農業国とくにエジプトにはふさわしいものではないと主張した<sup>(注3)</sup>。

党の指導者の1人サラーマ・ムーサは党を弁護した。かれは論説のなかで<sup>(注4)</sup>、地主と小作人の間には矛盾はなく党は両者の支持者であるべきであると述べている。また、別の論説では<sup>(注5)</sup>、党は反共産主義でありフェビアン協会のイデオロギーに従い「革命あるいはクーデターなしの発展」をスローガンとしていると述べている。

ところで、カイロの党の指導とアレキサンドリア支部の過激派メンバーとの間にイデオロギー論争が起こっていた。1922年7月30日、アレキサンドリアの過激派メンバーは他の支部の過激派メンバーをアレキサンドリアに招待して会議を開いた。この会議では、アレキサンドリア支部を党の本部とし、共産主義を党の教義とすべきであることを決定した。そして、党の名称は「コミンテルンの

エジプト支部、エジプト社会党」と改名された<sup>(注6)</sup>。

新しい組織の指導者は、ヨセフ・ローゼンタール、アントゥーン・マルーン Antūn Marūn, マフムード・ホスニー・アル・ウラービーであった。ウラービーが、コミンテルンへの加入を申請するために、モスクワで開かれた第4回コミンテルン大会に派遣された。帰国後の報告は、もしも党がその名称を「エジプト共産党」と変更し、農民のための綱領を用意し、ヨセフ・ローゼンタールと他のヨーロッパ人メンバーを放逐しなければ、コミンテルンはエジプト社会党を支部として承認できない<sup>(注7)</sup>と述べていた。

1923年1月、会議が開かれ党の名称変更を討議し、新綱領を認めた。この綱領では、党がエジプトとスダーンの解放に向って内外の敵に対し共闘を組むため両国人民の関係を強化すること、帝国主義と戦うために民族ブルジョアジーと民族戦線を編成すること、スエズ運河の国有化、国債とキャプチュレーションの廃止、労働組合の組織化とその法的承認の獲得、1日8時間労働、エジプト人労働者とヨーロッパ人労働者の賃金の平等、そして生産者協同組合と消費者協同組合の創設などのために闘うことを述べていた。

党は、綱領の一部を農民のためにさいて、大規模土地所有の廃止、10フェッダン以上の保有地を没収しその没収地を土地無き農民に分配すること・あるいは農民ソビエト peasantry Soviets によって経営される「人民農場」とすべきこと、土地所有面積30フェッダン未満の農民の負債を張消しにし、所有面積10フェッダン未満の農民の地租を廃止することなどを要求した<sup>(注8)</sup>。

新綱領を公表するやいなや共産党は、ヨセフ・ローゼンタールによって1921年に設立された労働

組合連合を再編成した。1923年2月には、党の打ち出した「直接行動」のスローガンが実行にうつされアレキサンドリアで労働ストライキが行なわれた。ゼネストを組織するための試みがなされたが、占領当局はホスニー・アル・ウラービーとアントゥーン・マルーンおよび連合の2人の指導者ハッサン・ホスニー Hassan Hosni とアミン・ヤヒア Amin Yehia とを逮捕した。かれらは、軍事法廷に付託された<sup>(注9)</sup>。

1923年の憲法発布は共産党によって反対された<sup>(注10)</sup>。このことは、おそらく、ワフドや民族ブルジョアジーに対する党の態度を意味すると同時に、経済的諸要求に対するプロレタリアの闘争を組織化することによって「直接行動」を正当化するものであった。

ストライキに突入する前に、共産党は、ワフドの指導者かつ党首であるサード・ザグルール Saad Zaghlul にたいし、労働組合の法的承認の発令、政府による失業者のための職業斡旋所の設立、生活水準向上のために土地無き農民の労働組合形成、およびソビエト連邦の承認などを勧告した<sup>(注11)</sup>。

ストライキは、1923年11月に端を発し、1924年3月まで続いた。アレキサンドリアでは労働者たちが工場を占拠し、企業家を放逐した。同時に、カイロでもストライキが勃発した。

1924年3月、政府が秩序回復のために仲裁に乗り出しストライキ運動を排除した。内務政務次官ガマル・エッ・ディーン Gamal ed-Din Pasha が実状調査のためにアレキサンドリアに派遣された。ガマルはカイロに帰っての閣議報告で、最善の解決策は共産党と労働組合連合の両者を解体することであると述べた。警察は両組織の根拠地とメンバーの家屋を攻撃し、メンバーを逮捕し証拠書類を押収した<sup>(注12)</sup>。刑法に新条項が加えられ

「人間社会に対し革命的な思想をまき散らし、人民をして社会体制への抵抗にかりたてようとする者には5年の禁固刑を科する<sup>(注13)</sup>」ことが決められた。

検察庁は、共産党がカイロ、タンタ、ザガツィク Zagazig, エル・マハッラ・エル・クブラ el-Mahalla el-Kubra, シェビン・エル・クーム Shebin el-Kūm およびアブ・クールカス Abu Qūrqa くに支部をもっていることを発見した<sup>(注14)</sup>。

危険を避けようとして、連合の指導者たちは、連合と共産党とは何の関係もないし、しかも連合は政治に無関心であるという声明を発表した。連合の主たる関心は、労働者の待遇をヨーロッパ人労働者並みに改善することにあつた<sup>(注15)</sup>。

1924年5月28日、11名が裁判所に召喚された。そのなかには、共産党と労働組合連合それに2人のロシア人の計6人の指導者が含まれていた<sup>(注16)</sup>。かれらは、6カ月から5年に及ぶ刑期の異なる禁固刑に処せられた。

共産党の活動が不活発な原因は、歴史的状況の誤った認識にある。当時は、民族解放運動の段階にあり、民族ブルジョアジーが指導力をもっていた[共産]党は、帝国主義に対抗して革命的な小ブルジョアジーを包み込んだ民族統一戦線を形成するかわりに、党を解体しようとする民族ブルジョアジーにとって絶好の口実を提供する階級闘争を展開してしまったのである。このとき以降、ワフドはしきりに労働運動をコントロールしようとした。

(注1) 『アル・アハラーム』1924年3月7日版の記事ヨセフ・ローゼンタールの告白を参照せよ。

(注2) 『アル・アハラーム』1921年8月20日～24日。

(注3) 同上紙 1921年9月17日。

(注4) 同上紙 1921年8月18日。

(注5) 同上紙 1921年8月31日。

(注6) 同上紙 1923年1月9日。

(注7) 同上紙 1924年3月7日版の検事に対するヨセフ・ローゼンタールの告白を参考。

(注8) これは、1924年12月19日の『アル・アハラム』に載った党の序文のアラビア語版を翻訳したものである。アグワニ Agwani は、*Labour Monthly*, vol. 2 (March 1922) pp. 276-279. の英語版を引用している。これには少し誤りがある。(Agwani, M. S., *Communism in the Arab East*, Asia Publishing House, India, 1969, pp. 4-5. を参照せよ)。

(注9) 『アル・アハラム』1923年3月19日～24日。

(注10) 同上紙 1923年5月1日。

(注11) 同上紙 1924年12月19日。

(注12) 同上紙 1924年3月6日～27日。

(注13) 同上紙 1924年3月4日。

(注14) 同上紙 1924年7月7日。

(注15) 同上紙 1924年3月10日。

(注16) 6人の指導者は、マフムード・ホスニー・アル・ウラービー Mahmūd Hosnī al-Urābī, アントゥーン・マルーン Antūn Marūn, サフワン・アブル・ファティフ Safwan Abul-Fat'h, エル・シャハト・イブラーヒーム el-Shahat Ibrahim, および2人のロシア人イブラム・カツツェ Ibrām Catz とハイレル・ザンベルク Hillel Zanberg であった。

#### IV 労働運動に対する民族ブルジョア ジエの支配

1924年4月、前警察署長でワフド中央委員会の書記長であるアブドゥール・ラフマーン・ファフミ Abdūl-Raḥmān Fahmī によって新しい労働組合連合が創設された。しかし、ワフド党内閣は労働問題の解決を図ろうとしたのではなかった。しかしながら、1924年11月、連合はワフド党内閣の辞職後すぐに解体された。

これまでの20年間にわたって続いてきた親イギリスの歴代の政庁は労働運動を敵視してきた。警察当局は労働組合を攻撃し、集会を禁止し、労働組合の活動分子を逮捕した。共産主義者幹部の幾人かは細胞の組織化に成功したけれども、その活

動範囲は狭く、メンバーは小ブルジョア知識人にかぎられていた。かれらは、ワフドの中道という不治の病いを治癒したあとでワフドを支配下に組みこんだ革命的労働者軍を創設するという思想にふりまわされてしまっていた。

30年代早々に発表された綱領は、エジプトにおける反帝国主義・反封建主義革命の直接的かつ緊急の目的は、帝国主義者のきずなの破壊と反動主義的王制の打倒、エジプトの完全独立、農民革命、1日8時間労働、労働者の待遇の徹底的な改善、ソビエト型の労農政府にならった労働者階級と農民による革命的で民衆的な独裁を確立することである<sup>(注1)</sup>、と宣言している。

しかし、それは全くの理想にすぎず、共産主義の細胞は労働組合と効果的なコミュニケーションをもっていなかった。これとは反対に、民族ブルジョアジエは連合を設立し指導することによって労働組合を支配していた。幾人かの知識人たち、その大部分が弁護士であるが、かれらは労働組合をある一つの連合体に統一するのではなくて、最初に連合を創設し、次に労働者たちが自分たちの政治団体を支持するための基盤としての労働組合を組織化しようとしていた。それは労働組合運動の展開における珍妙な現象であった。

ところが1930年4月、ワフドはこの種の連合の設立に成功した。有名なワフド党员であるアジーズ・ミルハム Aziz Mirḥam は、労働組合総同盟を組織した。この総同盟は、アフメッド・モハメッド・アガ Ahmed Mohamed Agha とフスニ・エル・シェンティナウイ Hūsni el-Shentīnawī というワフド党员の弁護士によって統率されていた<sup>(注2)</sup>。

同時に、大地主で立憲自由党のメンバーでもあるダワード・ラティブ Dawūd Ratīb Beyが同じ

名称の連合を設立した。この連合によって、輻重労働者とカイロ市行政機関労働者と理容師のために三つの労働組合が設置された。この連合は、地主や中流上層階級の利害と共通性をもった団体であり、労働者階級の支持を利用すべきであるという考えをその基礎としていたのである。1930年12月、この連合の評議会におけるワフド党员が、ダウード・ラティブを追放し、王室の一人でワフド党员の支持者であるアッバース・ハリム皇子 Prince Abbas Halim を連合の会長に任命した<sup>(注3)</sup>。それから1カ月後、アフメッド・モハメッド・アガによって統率されたワフド党の連合は、アッバース・ハリム皇子の連合に合併し、ワフド党の知識人たちは相談役として活躍した<sup>(注4)</sup>。

シドキ Sidqi Pasha 内閣<sup>(注5)</sup>は、ワフドの影響を受けたこのような連合に対し非常に敵意を示した。1931年3月15日、官憲は連合を解体し労働組合の指導者たちを逮捕した。しかし、7月になると連合は、マドリッドの国際労働組合連合 (IFTU) の会議に事務総長のイブラヒム・ザイン・エッ・ディンを派遣した。かれは、[その席で]エジプト政府の敵対行為とエジプトにおける労働組合の弾圧を訴えた。会議は、エジプト政府に抗議をし、イギリス労働党内閣の仲介を要請し、労働組合の事情調査のために[IFTU]事務総長ウォルター・スカベンリス Walter Scavenlis を派遣することを決定した<sup>(注6)</sup>。

労働組合運動の危険を軽減する試みとして、政府はエジプトの労働状態を研究し労働法の草案をつくるために国際労働事務局の局長代理バトラー H. B. Butler を招聘した。さらに、政府は内務省所轄の労働局を設置した。しかし、労働法の制定はなおざりにされていた。

労働組合は、官憲による敵対行為のみならずブ

ルジョアジーの指導権についての論争にも悩まされた。アッバース・ハリム皇子は労働組合総同盟に対するワフドの影響を回避しようとした。しかし、1935年2月にワフドは労働者最高会議という名称の別の連合を設立した。アッバース・ハリムによって統率された連合に所属していたほとんどの労働組合が新しいワフド党の連合に加入していった。両者は、待遇改善のために闘うどころか、お互いにいがみ合っていた。かくて、両者は警察にとって恰好の餌食となり、多数の労働組合が解体させられ、その指導者たちが逮捕されてしまった<sup>(注7)</sup>。

ブルジョアジーの指導権に関して論争がおこっているにもかかわらず、1935年11月にエジプトの労働者階級は1923年憲法の復活を要求するデモに参加した。労働者階級は、学生と行動をともにし、王制とイギリス帝国主義に対抗する民族戦線を編成するよう諸政党に圧力をかけた。この運動が成功して、憲法は復活した<sup>(注8)</sup>。

1936年、労働ストライキが全国に波及した。当時は、エジプト資本主義とヨーロッパ資本主義との蜜月期であった。いくつかの株式会社が、とくに織物工業の分野で設立されたが、労働条件はかなり悪いものであった。1935年には、一定年数のあいだ職に就いた場合に退職金を支給することが布告された。企業家たちは、退職金の支払いを避けるために、労働者を数カ月雇用したのちに解雇することをつねとしていた。生計費が増加しているにもかかわらず、賃金は引き下げられ、労働者は生計を維持できなかった。

経済的諸要求の実現に向けてストライキを打つことのできる能力ある連合が、欠如していたために、ストライキの大半は暴力的となり、労働者たちは機械や工場を破壊した。警察は、アル・ハワ

ムディーヤ al-Hawamdiya の労働者とアレキサンドリアの輸送機関労働者に銃弾をあびせた<sup>(注9)</sup>。

悲惨な労働条件と、当局や企業家の敵対行為のために、労働組合主義者たちは政治団体の影響を受けない連合を結成せざるをえなかった。1937年の9月に、若干の急進派労働組合主義者たちが、連合を組織し労働党を結成する目的で、「労働運動組織団体」を設立した。有名な共産党労働組合主義者であるモハメッド・ユーセフ・エル・メッドリク Mohamed Yousef el-Meddarik がこの団体のリーダーであった。

王室の支持を受けたアッパース・ハリム皇子は、労働組合運動の指導を継続する意図を明らかにした。

1938年3月、労働運動組織団体にいるアッパース・ハリム皇子の代理人たちは、かれを「エジプト王国労働組合総同盟」——これは、32の組合によって構成されている——の会長の地位に選出した。その1カ月後に、急進派のメンバーはハリム皇子を免職し、かわりにアレキサンドリアの織物業者であり議会のメンバーでもあるモハメッド・エル・ディミルダッシュ Mohamed el-Dimirdash を会長に選任した<sup>(注10)</sup>。

1930年5月8日、総同盟は急進派の指導のもとにデモを組織し、労働組合の承認・労働災害に対する補償・労働時間の短縮・最低賃金の固定および失業問題の解決<sup>(注11)</sup>などを要求した。政府は労働条件の改善を約束したが、一年経っても何ら積極的政策がみられなかった。

1939年6月13日、総同盟は政府が労働組合承認法令の草案を議会に提出するまでハンガーストライキを開始した。政府は議会に草案を提出せざるを得なかった。議会のメンバーは大半が中産上層階級、企業家、地主から構成されていたので、こ

の法令が議会を通過するのは困難であった<sup>(注12)</sup>。総同盟が発表した綱領では、労働階級は政治団体や政治家に頼ることなく労働条件の改善に向って闘争すべきであると宣言している。しかし、第2次世界大戦の勃発や戒厳令の布告は、政府に対して総同盟の解散とその指導者の逮捕に絶好の口実を与えた<sup>(注13)</sup>。

(注1) Agwani, *op. cit.*, p. 8.

(注2) 『アル・アミル・アル・ミスル』 1930年5月26日。

(注3) 拙著, *op. cit.*, pp. 88-89.

(注4) *Ibid.*, p. 91.

(注5) 1930年6月に、シドキ・パンシャは首相の職に就いた。10月には、1923年憲法を廃棄し、知識人および中・大地主階級に投票権を認めた別の憲法を公布した。大衆は、投票権を得られず、ワフドは政権を握ることができなかった。

(注6) Badaoui, Zaki, *Les Problemes du Travail et les Organisations Ouvriers en Égypte*, Alexandrie, 1948, p. 29.

(注7) 拙著, *op. cit.* pp. 95-102.

(注8) Abdul-Rahman al-Rfi, *fi A'qab al-Thawrat el-Misriya*, vol 2, pp. 202-212.

(注9) Sayed Qandil, *Niqabiyati, al-Risalat ul-Ummaliyat ul-Aula*, Cairo, n. d., p. 31.

(注10) 拙著, *op. cit.*, pp. 106-108.

(注11) 『アル・バラグ (Al-Balagh)』 1938年5月8日夕刊。

(注12) Badaoui, *op. cit.*, p. 42.

(注13) 拙著, *op. cit.*, p. 109.

## V 共産党組織の復活

第2次世界大戦はエジプトの工業に大きな刺激を与えた。輸入の急激な縮少が行なわれたのみならず、エジプトに駐屯していた連合軍隊の巨大な出費は工業生産物の需要を大いに促進させた。約20万人のエジプト人——そのうち8万人は熟練・半熟練労働者——がイギリス軍の作業場または基地で雇用されていた。また、中東補給センタ



— The Middle East Supply Center がいくつかの主要な工業を援助した。数種の工業、とくに織物業、食糧貯蔵業、化学工業、ガラス工業、皮革工業、セメント工業と他の建築資材業、石油工業、そして機械工業などが拡大する一方、野菜の乾燥、罐詰、ゴム製品、ジュート加工、部分品および道具類の製造、そしてとりわけ多種多様の化学と薬品など新しい諸工業が設立された。

戦後3年間はエジプト工業の繁栄期であった。外国製品の輸入は制限され、潜在的な需要が生産量を高く維持していた、否あるときには生産量を高めていた。新しい機械が大量に輸入され、多くの工場が再装備された。1949年までには、外国製品との競争があらゆる部門で大きな比重を占め始めた。在庫品が累積し、作業時間が減少し、いくつかの工場は閉鎖の止むなきにいたった。朝鮮戦争の勃発は、綿花価格の上昇とそれに伴う国内購買力の増加、および外国製品の競争力の減少とによって、エジプトの工業に新しい刺激を与えた。しかしながら、1951年までにこれら両方の刺激ともそのエネルギーを涸渇し、数種のエジプト工業とくに織物業と建設業が再び営業不振に直面することになった<sup>(注1)</sup>。

それゆえ、戦時中には労働力需要が増大しつつあり何千という農民が都会とくにカイロとアレキサンドリアに職を求めて移動した。イギリス軍の作業場と工場が閉鎖され、失業問題と賃金引き下げが発生した。一方では、生計費が第2表<sup>(注2)</sup>に示されるように急激に増加していた。

ところで、戦争終結までにエジプト人労働者階級は悲惨な状態となった。1942年に労働組合承認法令が発布され労働組合は登記されることになった。労働組合はストライキを打ち、当局側に対し政府機関労働者のための法律を発布させることに

第2表 (1939年7月—8月=100%)

年次(12月)	卸売物価	生計費
1939	122 %	108 %
1940	143	122
1941	183	156
1942	251	215
1943	292.7	257.2
1944	330.3	292.2
1945	333.4	290.5

成功した。かくて、民間部門における労働者の主要な要求と政府機関労働者の要求とは同じものとなった。

エジプトでは戦時中に共産主義運動の復活がみられた。マルクス主義者の研究サークルがカイロとアレキサンドリアに生まれた。そのうちのいくつかはトロッキストで、他はスターリン主義者であった。前者のサークルは、サラマ・ムーサ Salama Mūsa によって編集された月刊誌『アル・マジッラ・アル・ジャディーダ』*Al-Majalla al-Jadida* (新月刊) で活動した。後者のサークルは、二つの異なった名称; ハラカト・ウル・アブハス・アル・イルミーヤ *Harakat ul-Abḥath al-'Ilmiya* (科学的研究の動向)とラジュナト・ナシュル・アル・サカファ・アル・ハディーサ *Lajnat Nashr al-Thaqafa al-Haditha* (現代文化普及委員会) を持っていた<sup>(注3)</sup>。これらのサークルの現在までの歩みは錯雑をきわめている。

1942年に、マルクス主義者の研究サークルから二つの政治グループ、フランス系ユダヤ人の大富豪の後裔であるアンリー・クリエ Henry Curiel によって統率されたエジプト民族解放運動 (MELN) と、ヨーロッパ系ユダヤ人ヒレル・ミュバルツ Hillel Schwarz の指揮するイスクラ *Iskra*——そのメンバーはともに30人足らずの知識人たちであった——とが発足した。二つの党派のあいだにある見解の相違は、主として、エジプトにおける共産主義運動の実践問題——共産主義運動は大衆運動

にまで発展させるべきか、あるいはむしろその初期段階の幹部養成に徹するべきか？ この運動の政治的な成熟度を引き下げることになるけれども、運動の隊列のなかに土着エジプト人を多数組み込む努力をすべきであるか？——が中心となっていた。これらの点についての論争は長年続いた。MELN は、党の細胞を闘争単位と考えたのに対し、他方 Iskra は幹部養成に力点を置いていた。MELN は党の「エジプト化」と「プロレタリア化」のために戦った。他方、Iskra は、現在の状況下では幹部はほとんどインテリゲンチヤそれもしくはしばしば少数民族にすべきであり、かつ党の共産主義的性格を弛緩させるような要素を生み出す人為的な試みは避けられねばならないと主張した。1943年9月、MELN メンバーの多数の者が、タハリール・アル・シャウブ Taḥrīr al-Sha'b (人民の解放)として知られる新しい組織——これは党のエジプト化の必要性を強調している——を設立したとき、[両者の間には]なお一層の亀裂が生じた(注1)。

1943年におけるソビエト連邦の政治上の承認をしていわれる民主主義陣営との同盟は、エジプトにおける共産主義運動の発展に絶好の機会を提供した。

1943年と1945年の間に、主としてアレキサンドリアを中心とした学生や知識人のワフド党員のグループから構成された共産主義グループが、アッタリーアー At-Tali'a (前衛)を設立した。他の人たちは二つのグループ、マルクス主義者防衛同盟 The Marxist League Citadelle とアル・ファグル・エル・ジャディード Al-Fagr el-Jadid (新黎明)を結成した。MELN以外では、これらのグループはいづれもさほどたくさんのメンバーを抱えていなかった。しかし、このことはグループ間の

激烈な議論を回避させることができず、さらには、共産主義組織におけるプロレタリアートとインテリゲンチヤの相対的重要性の問題をめぐるグループ間の分裂は一層進行していった(注5)。

このような論争が行なわれていたにもかかわらず、共産主義組織は労働組合のための連合を組織して労働組合運動を支配しようとした。1942年の承認法令によって労働階級は連合を組織できなくなった。巧妙にも、労働組合は「評議会」という名称で連合を組織しようとした。1944年12月、民間部門の労働者に対して政府機関労働者と同じ労働法の発布を求める労働者の闘争を組織化するために、「会社および私的機関労働組合評議会」がカイロの25労働組合によって設立された。MELNの労働組合主義者幹部がこの評議会を指揮した。1945年9月に、MELN 幹部として有名な3人のメンバー(注6)の派遣団が、パリで開かれた W. F. T. U. の会議に評議会の代表として出席した。

同時に、アル・ファグル・エル・ジャディード al-Fagr el-Jadid 共産主義組織も、労働組合運動を統率しようとしていた。1945年8月30日、労働組合が会議を召集され、W. F. T. U. 会議におけるエジプト労働組合のもう1人の代表に「新黎明」の有名な幹部モハメッド・ユースフ・エル・メッダリクを選出した。

しかしながら、会社および私的機関労働組合評議会の方が、労働運動に一層の影響力を持っていた。1946年5月1日、評議会は労働組合を召集し、労働組合のための総同盟としてエジプト労働組合評議会を設立する討議を行なった。警察はこの会議を禁止することに失敗した。かくて、評議会が設立され(注7)、労働状態の改善のための労働者の闘争を組織した。

カイロ郊外のシュブラー・エル・ヒーマ Shūbra

el-Khima やアレキサンドリアのいくつかの織物業は工場閉鎖をせざるをえなかった。他の織物業も生産を低下させ、人数を削減し、賃金を引き下げた。労働者はデモをかけて、工場を攻撃し、警官と衝突した。

1946年5月10日、評議会は綱領を発表し、イギリス軍の撤退、政府機関労働者の労働法を民間部門労働者にも適用すること、企業者に工場閉鎖をさせないようにすること、政府はアメリカ軍およびイギリス軍の作業場を買収し事業を継続すること、失業保険を実施すること、賃金を引き下げないで週40時間労働とすること、5月1日を休暇にすること、そして拘留されている労働組合主義者の釈放などを要求した。また、1カ月を最終期限としてゼネストに突入することを決定した。

政府は、最終期限の5日前になって、エジプト工業連盟が諸要求を調査するまでストライキを延期するよう評議会に交渉してきた。しかし、工業連盟は諸要求の受諾を拒否した。そこで6月25日にストライキ突入が決定された。ストライキの実施を妨害しようとして、政府は運輸・通信労働組合と交渉しかれらとそれぞれ協定が成立した。それ以後は、効果的なストライキを打つことができなくなってしまった。

1946年7月11日、当局は政治的対立に終止符を打とうとして、評議会の指導者たちを逮捕した。同時に、共産主義者グループのメンバーとも共産主義的ワフド黨員たちを逮捕した<sup>(註8)</sup>。

これらの逮捕がかりに少しでも効果をもちえたとすれば、それは〔逆に〕共産主義の主要な党派のあいだに協調を呼び起こしたことである。1946年から1947年の冬にかけて、両グループの指導者たちのあいだに会談が持たれ、長時間討議した末に、両者は1947年5月合併することを決定した。

新しい運動は、アル・ハラカト・ル・デモクラテイーヤ・リツ・タフリール・アル・ワタニー al-Ḥarakt ul-Democratiya lel-Taḥrir al-Waṭāni (HADITU)、つまり民族解放のための民主主義的運動という名前で知られるようになった。この新しい連合は、1948年7月までの約1年間続いた。これより数カ月前に、「人民の解放と防衛」が崩壊し、このメンバーのある者は MELN に加わり、他の者は Iskra にはいった。At-Tali'ā だけは、Iskra の指導者が懸命に説得したにもかかわらず、外部に居残り合併しなかった<sup>(註9)</sup>。

警察による弾圧や内部における軌轢にもかかわらず、共産主義の影響は増加する傾向にあった。1947年9月に、共産主義者はシュブラー・エル・ヒーマで2万7000人の労働者からなるストライキを組織した。1948年1月には、スダーン問題に関連したストライキがカイロ大学で組織された。4月には、共産主義学生たちが、賃金引き上げと1日8時間労働を要求する警察官のストライキを支持することになった。大衆デモがカイロとアレキサンドリアで組織され、警察と衝突を起こした。共産主義者はこの機会を利用して、パンと仕事を求めるより広範な運動を展開した。さらに、教育団体や労働組合や軍隊のなかに多数の共産主義の細胞が確立された。フクステップ Hukstep やアブーキール Abūkir の監獄では、共産主義拘留者が、パレスチナ戦争のときにエジプト政府が逮捕した幾人かのムスリム同胞団員や急進的ワフド黨員たちを洗脳することに成功した<sup>(註10)</sup>。

1950年の初めに、HADITU (the MDLN) の労働組合幹部は労働組合の連合を組織しようとして大いに奮闘した。HADITU 労働者の幹部ヤシン・ムスタファ Yasin Mustafa とモハメッド・ファテヒ Mohamed Fatḥi が、「エジプト労働者階

級への助言」と題する小冊子で連合設立の計画案を公表した<sup>(注11)</sup>。この計画案は、1951年末に設立された「エジプト労働組合総同盟準備委員会」の基礎となった。1952年1月27日の会議には、総同盟設立の討議のために、労働組合を召集することが決められていた。しかし、1月26日早朝のカイロ焼打ち事件の直後に戒厳令が布告され、左翼分子が逮捕され、会議開催の望みが絶たれた。

準備委員会は、カイロ焼打ち事件を非難した「エジプト人およびエジプト人労働者階級のために」と題する声明文を公表し、暴力と紛争は帝国主義の目的に適うものであり、イギリス軍撤退のためには積極的な闘争を組織し民族的結束を固める以外に道はないと宣言した<sup>(注12)</sup>。

カイロ焼打ち事件は、当局の権威を失墜させた。結果において、共産主義とムスリム同胞団がエジプトにおける政治権力の当然の継承者として現われてきた。共産主義は、民族主義の大波を反帝国主義という革命的潮流に合流させることに成功していた。しかも、エジプトの歴史におけるこの最も決定的な瞬間において、そのイニシアティブは、いかなる政治的イデオロギーとの結びつきをも用心深く避けていた自由将校団の掌中であつた。そして、自由将校団が1952年7月23日に遂行した革命は、エジプト政治体制の全体的状況を徐々に変質させる<sup>(注13)</sup>と同時に、また、エジプト労働組合運動の歴史に新時代を画するものであつた。

(注1) Issawi, Charles, *Egypt at Mid-Century, An Economic Survey*, Oxford, 1954, pp. 141-142.

(注2) *National Bank of Egypt 1898-1948*, p. 75.

(注3) *Ruzal-Yousef*, No. 996, 記事名 “al-Tha’irunala-Miṣr.”

(注4) Lazueur, W. Z., *Communism and Nationalism in the Middle East*, 3rd-ed, London 1961, pp. 42-43.

(注5) Agwani, *op. cit.*, p. 32.

(注6) この3人は、ダヴィド・ナフーム David Naḥūm, モハメッド・アブデール・ハリーム Mohamed Abdūl Halīm, ムラード・イリアス・エル・カリュービー Mūrād Iliās el-Qaliubi であつた。

(注7) 拙著, *op. cit.*, pp. 118-126.

(注8) *Ibid.*, pp. 118-133.

(注9) Laqueur, *op. cit.*, p. 44.

(注10) Agwani, *op. cit.*, pp. 45-46.

(注11) Yosin Mūstafa & Mohamed Fat’hi, *al-Naṣiḥail al-Ummal fi Miṣr*, Cairo, pp. 14-22.

(注12) 拙著, *op. cit.*, pp. 136-140.

(注13) Agwani, *op. cit.*, p. 48.

## VI お わ り に

最後に、20世紀前半は、エジプトの企業家精神の発生と、悲惨な労働条件や政府の敵意に辛苦せねばならなかつた労働者階級との形成を特徴とするものであつた。労働組合を支配しようとした民族ブルジョアジーの試みは、労働条件の改善と階級意識の覚醒に対する労働者の闘争を妨げることとなつた。また、エジプトの共産主義者は、時代の性格を誤認し民族解放運動の時期と判断してしまつたために、かえつて共産党を排除しようとする民族ブルジョアジーに絶好の口実をあたえてしまつた。第2次世界大戦中に運動が復活したとき、共産主義は知識人と少数民族に全神経を集中し労働者を組み入れることには注意を払わなかつた。しかし、1950年末に共産主義運動のエジプト化が実現したときになって、労働組合の組織化と階級意識の覚醒とが可能となつた。しかしながら、1952年7月23日の革命は、共産主義運動の解体を招き、エジプトの政治構造を変質させた。

(訳者注) フラビア語のアルファベット表記は原文に従ふことにした。

(Dr. Raouf Abbās Hamed・カイロ大学講師)  
(現在当研究所客員研究員)。近代史専攻  
木村喜博・調査研究部